

限界社畜極めて死のうとしてたら

怪しい関西弁の

お兄さんに

拾われて

お礼におっぱい差し出したら

乳首もクリも調教されて

身

も

心

も

籠絡

されちゃう話



雨の音しか聞こえない。

残業帰りの午前二時、終電もない新宿駅東口。

ネオンに照らされながら重たい足を引きずる。

夜も車が飛び交うこの大通りに飛び出せば、明日はもう会社に行かなくてすむかもしれない。

そのときのわたしには、それしか考えられなかった。ほとんど無意識のまま、歩道を外れて車道へと足を向けていた。

「……姉ちゃん、死に場所はもっと選び」

そんなわたしの腕を、がっしりと掴む大きな姿があった。

それが、影虎さんとの出会いだ。

——限界社畜極めて死のうとしてたら怪しい関西弁のお兄さんに拾われてお礼におっぱい差し出したら乳首もクリも調教されて身も心も籠絡されちゃう話——

「影虎さん、新しいボトル来ました。どこに置けばいいですか？」

「ああ、どないしよ……って紗季ちゃん、あかんで。まだ本調子やないやろ」

振り向いた影虎さんが眉根を寄せて言う。

ピアスのたくさん開いた耳と、色つきのサングラス。全身黒ずくめで、背はお店の誰よりも高い。お腹に響くテノールボイスと強めのイントネーション、おまけになぜか甘い匂いをする煙草を吸っていて、まるで一般人には見えない怪しい雰囲気をしているけれど……
本当はとても面倒見がいい人だ。

「居候なので、わたし。少しは役に立たないと」

あれから一週間。

わたしは影虎さんが経営するシーシャバーに身を寄せていた。

あのととき、必死に振り解こうとした腕は体格の良い影虎さんには全くの無力だった。傘もささず歩いてきたわたしを守るように傘をさしてくれて、その場で根気よく話を聞いてくれ、影虎さんが経営するシーシャバーまで案内してくれたのだった。

「居候やなくて療養中や。離し、俺が持つから」

「いやです、バックヤードの手前でいいですか？」

「アホ、そんな仕事ばっかしたからああなったんやろ？ 今の紗季ちゃんは、休むが仕事や、引っ込んで」

両手で抱えていた段ボールをひょいと片手で抱えられて、しっしっしと追い払われる。結局バックヤードの手前に段ボールを置いているんだから、わたしが持つっていつでも一緒だったのに……。

不服げな表情をしてその場に佇んでいると、戻ってきた影虎さんが仕方なさそうに笑いながら頭をぽんぽんと撫でてきた。

「働き者やなあ、ほんまに。熱は？」

「……ないです」

「ほな測るか」

「いやです。微熱です、大したことないので」

どこからか体温計を取り出して近付く影虎さんからするりと逃げる。〽度代は微熱だ。会社ではずっとこのくらいだったし。

「会社から連絡来た日は熱出とるなあ……もう着拒したらええのに」

「……退職の手続き、ちゃんとしてもらえなかつたら困るので」

影虎さんと出会った次の日、雨に降られたせいか会社が嫌すぎるせいか——恐らくそのどちらもだが——わたしは高熱を出してしまった。

会社に連絡しなきゃと焦っていると、影虎さんが代わりにしたるよ、と言って無理やり電話を取り……そのまま父親のふりをして、退職まで言い渡してしまったのである。

『ええ、はい——引き継ぎもなしに困る、ですか？　紗季は会社に行きたくなくて車道に出たと言っています。もしまた同じ事があって、取り返しがつかずニュースにでもなったら……そちらの方が、困るのでは——』

あの時は本当に驚いた。きれいな標準語と、有無を言わせない威厳のある物言いで、わたしが車道に飛び込もうとしたことを告げ……そうしてあっさり、会社には二度と行かなくてよいことになったのだった。

「ほかに、わたしにできること、ないですか」

「んー？　ああ……今日なア、紗季ちゃん用のベッドも届くんよ。紗季ちゃんの仕事はそれで寝ることやな」

「えっ」

生活が立ち行かないようならしばらくこのバーで働けばいいと言われて、働こうと思っているのだけれど……影虎さんはまだ何もさせてくれない。それどころか、こうやってわたし用の色んなものを買って入っては休め休めと言われるばかりだ。

「すみません……そんな、邪魔なものを」

「いやな、この部屋……元々住めるくらい整えるつもりやってん。けど俺があんまおらんかったからスツカラカンでな、ちょうどええわ」

確かにここには、それなりに広さがあるわりにソファと机と、ちょっとした棚があるくらいだ。

この場所はバーの隣の貸しスペースで、お店のバックヤード兼マネージャールームにしているらしい。家が遠く一人暮らしだったわたしは、熱が完全に下がって体調が良くなるまではここにいろと言われている。

……おそらく、また車道に出してしまわないか心配されているのだと思う。

「影虎さん、前はあんまりいなかったんですか」

「そうやで、一人やと寂しいやん。今は紗季ちゃんがおるからええわ」

サングラスの奥の瞳が優しく笑う。

影虎さんはこの一週間わたしとたくさん一緒にいてくれていますが、度々どこかから連絡を受け、急いで出掛けていくこともあった。きっと本当はもっと忙しい人なのだろう。バー以外にも何かやっているんだらうけれど、行き先を教えるはくれない。

でも、どんなことをやっても関係ない。

影虎さんは、わたしを助けてくれた、大切な人だ。

「わたし、もっと影虎さんの役に立ちたいです。お店の手伝いとか、家事とか……それ以外でも」

「もう十分やってくれとるやんか。店もここもバックヤードも見違えるほど綺麗になって……やらんでええ言うとするのに」

「他にも。経理とか、事務もできます」

眉根を寄せて紫煙をくゆらす影虎さんに迫る。困らせている自覚はあるけれど、こんなにお世話になっているのに、何もしないで休んでいるなんてことはできない。

それに……正直、何かしてないと焦ってしまうのだ。

「そうやなあ……そんな言うんなら、紗季ちゃんのカラダ、貸して貰おか」

目を細めて悪戯っぽく笑う影虎さんにこくりと唾を飲み込む。

わたしの、からだ……。

影虎さんが望むなら——そう思って頷いた。

……それなのに。

「……どういう状況ですか、これ……?」

「んふふ、かわええ女の子膝に乗せて映画観るの夢やったんよなア」

低くも弾んだ声が間近に響く。わたしはソファァーに深く座る影虎さんの長い足の間に座らされていた。

(これ、膝に乗ってるんじゃないかって……ただ足の間にいるだけじゃ……?)

疑問に思うわたしをよそに、影虎さんはトニックウォーターを飲みながら楽しそうに映画を観ている。

目の前の大きなモニターには不気味なピエロが映っている。たびたび驚く怖いシーンがあるのに、影虎さんが驚く様子はない。

「ひえっ……」

「うわ嫌やなあ、あんなところおったら」

「か、……影虎さん」

「ん〜？」

「……その、……すきまが……」

「すきま？」

「せ、背中。背中を……くっつけたい、です」

足のあいだにすっぽり収まっているのに、わたしの身体はちっとも影虎さんに触れていない。それが怖くて縮こまりながら言うと、影虎さんはほんの少し逡巡してからわたしに

腕を回し、ぼすん、と凭れさせてくれた。

「……そんな怖い？ すまんなあ、見過ぎて感覚おかしなっとなるわ」
「いえっ……くっついていれば、平気です。面白いです」

背中から伝わる体温に安心する。腕が遠慮がちに離れて行こうとするので両手でそっと抑えて抵抗すると、仕方なさそうにぎゅっと抱き直してくれた。嬉しい。

「ひゃっ」

「……ふ、くく……っ」

「……!? な、何で笑うんですか……っ」

「ふ……身体ビクってますんの、可愛えなあって」

ジャンプスケアの度にわたしの身体が跳ねるのがバレてしまった。

よしよし、と言うようにもう片手で頭を撫でられる。

くすぐったいような、でも嬉しいような感覚に包まれて、そのまま映画を見続けている

と、いよいよクライマックスに差し掛かった。

「……あのー…紗季…さん…?」

「ひええ……っ」

「これは……どういう状況なんやろ……聞いたる?」

「あつだめ……何でそんなとこ逃げ、ぎゃっ」

気付けばわたしは影虎さんの膝に乗り上げ、思い切り首に抱きついてた。

唾然とした様子の影虎さんには気付いているが映画を見ていてそれどころではない。もうすぐ主人公がピエロに捕まってしまう。

「あ、捕まっ……!! あ……っえ、あれ……? お、終わりですか……っ?!」

「……二部作やねんな、これ」

「そんな、気になるところで……。影虎さん、続きも——あっ」

ハラハラする気持ちがどこか消化不良で不満げに影虎さんの顔を見ると、予想以上に顔

が近くて心臓が跳ねる。

「す、すみません。重かったですよね」

「アホ、軽すぎるくらいや……っーかそういう問題やないで。紗季ちゃんなあ……危ないやろ、こんな男にホイホイくっついたら」

眉尻を下げて優しく諭された。

怖いを見せて悪かったけどな、と言われてふるふると首を振る。

「誰にでもこうなわけじゃないです、影虎さんだから」

「あのなあ……、俺やって急に胸とか尻とか触ったりするかもしれへんのやで」

「……影虎さんでも、おっぱい触りたいか思うんですか？」

「俺を聖人君子かなんかやと思っとるん？ 男なら当たり前や、そんなん」

「じゃあ、あの……どうぞ」

「……………は……………？」

膝に乗ったまま答えると、影虎さんの切れ長の瞳が丸く見開く。気にせず、着ていた薄手の上着を肩から落とした。

胸くらいで影虎さんの役に立てるなら、安いものだ。

「触りたいって思ってもらえてるなら……あんまり大きくはないですけど、ないわけじゃないですし……っひゃ、っ?」

「——怖い目見んとわからへんの?」

突然、少しだけ怒気を含んだ低い声と共に視界がぐるりと反転した。

乗り上げていたはずの身体がいとも簡単にひっくり返されて、どさりとソファーに沈み込む。

覆い被さる影虎さんで視界が暗くなって、自分でも驚くくらい心音が高鳴る。

「なあ紗季ちゃん、俺力強いねん。簡単にこういうこと、出来てしまうんやで」

「っ、……影虎さん、く、擦りたいです……っ」

「ほら、ちゃんと断って逃げへんと。このまま触られて、酷い事されてまうよ?」

整った顔が近づいて、わざと低くした声で囁かれる。

シャツの上から大きな手がお腹をなぞるけれど、きわどいところは避けられていて、ただわたしを驚かすためのような。

ドキドキする。震えてしまう。

——でもこれは、恐怖じゃない。

「に、逃げられないです……っ」

「そうやんな、怖いやろ？ やから簡単にくっついたら——」

「違います……！ 影虎さんだから……っ、わたし、影虎さんに触りたいって思ってもらえてるなら、嬉しいから……逃げられないんです……っ」

頬も首も、全身が熱い。

緊張して震える手で、影虎さんの大きな手を取る。恐る恐る胸元に運んでいくと、影虎さんが小さく息を詰めて、ほんまにええんやな、と囁いた。

——もにゅ……♡ さすさす……ふにゅふにゅ……♡

「なんや、ちよお大きくなった？ 紗季ちゃん」

「……そんな、こと……っ、ふ……っ、ない、です……」

あれから一週間。

ようやく熱が引き、少しだけお店の手伝いも許してもらった中で、わたしは毎日、影虎さんに、胸を……揉まれている。

結局あの日は、緊張で震えが止まらないわたしを見かねて「今日はやめとこ」と言われてしまった。

次の日覚悟をしていたのに何もされなくて、恥ずかしさを堪えて今日はしないんですか

と聞いたら、震えとる子に手出せへんよ、と優しく諭されて。

じゃあ慣れるまで触ってくださいと詰め寄って、影虎さんを苦笑させてしまった。

(震えないようには、なってきたけど……)

それから毎日ソファアーの上で、この間のように後ろから抱かれながら、おっぱいを……揉まれている。

変わらず服の上からだけれど、初日よりも、少しずつ長く。

(……最近、なんか、ぞわぞわする……)

「いや、ほんまに大きくなっとるで。最近は飯も残さんと食えるようになったやんな。偉いなあ」

「そう、ですけど……すぐ、変わる……わけじゃ、……っん……!」

ぐにゅう……と持ち上げてから、ぷるんっ♡ と解放される。最初はこんな、えっちな

触り方じゃなかった気がするけれど……少しでも早く慣れようと思って、ブラジャーを外すようになってから、触り方が激しくなった。

どんな触り方をしてもらっても構わないけれど……変な声が出そうで、恥ずかしい。

「気持ちええなあ、紗季ちゃんのおっぱい。形もええし、柔らかくて弾力もあって、ずっと触ってたくなるわ」

「そんな……っでも、気に入って、貰えてるなら、よかったです……っ、！　っく……う、」

ごっごっとした指で、すり……♡　と、腋の近くを撫でられる。最初はくすぐったいだけだったのに、最近はぞくぞくと腰に甘い疼きが広がってしまう。

腕の中で身を振ると、それに気付いた影虎さんが手を止めて耳元で囁く。

「何やの、もぞもぞして。……嫌になった？」

「ちが……っいます、本当に……っ、んっ……！　そ、その……」

慌てて首を振ると、また手の動きが再開される。もにゅ♡　もにゅ♡　と揉まれながら、

俯いて言った。

「く……くすぐ、ったくて……」

「……へえ？」

そう言った瞬間。

なにか、影虎さんの雰囲気が変わったような気がした。

「服の上から揉まれとるだけで……くすぐりたい、なあ」

「く……く……っは、はい……だからその、もぞもぞしちゃって、……う、ん……っ」

わたしが身を振ったところを確かめるようにすりすり♡ と撫でられる。

触る手と、影虎さんの低い声に反応してぶく……♡ と、乳首が勃起してきてしまった。
……どうしよう、恥ずかしい。

「っあ——あの……、っすみません、影虎さん、今日は……これくらいで、……っひ、♡」

「嫌やないんやろ？」

もにゅ♡ もにゅ♡ すり、すり、すり……♡

胸を這う指が先っぽに近づく。乳輪あたりを確かめるように撫でながら、わたしの反応を伺っているようだった。

(……乳首、勃ってるの……バレてる……？ 直接触られてるわけじゃないのに……ううっ、恥ずかしい……)

はしたないと思われていたらどうしよう……と、恐る恐る上を向いて、影虎さんのほうを見る。

そのときだった。

ぞくぞくと、恐怖のような興奮のような、言い知れない感覚が襲った。

「っ嫌じゃない、……けど、待って、くださ……っ」

「待って、なァ……ええよ。どれくらい？ 五秒？ それとも、十秒？」

影虎さんのサングラス越しの目がいつもよりも細められて——まるで捕食者のような瞳をしていて、一気に身体の熱が上がる。

ええよ、って言ったのに手は全然止めてくれない。影虎さんは勃った乳首を挟むように指を広げてすり……♡ すり……♡ と撫でてくる。こっちも触って、って言うみたいに乳首がぷっくりと突き出していつて恥ずかしい。

「んんっ……わ、わからな……くて、えっと、落ち着くまで……っ」

「落ち着くってなんよ？ おっぱい揉まれとるだけやろ？」

「……その、く、くすぐったい、から……っ」

「ほんまに、くすぐっただけなん？」

「……………う、……………っ」

「紗季ちゃん、嘘ついたらあかんよ」

諭すような優しい声にきゆう、と喉の奥が鳴る。むにゅ♡ と揉まれる度、ちゃんと言えって言われてるみたいだった。

恥ずかしさをこらえようと裾をぎゅっと掴みながら、口を開く。

「……っごめんさい、わたし、本当は……その……き……、きもち、よくなっちゃって……っひ、あっ!??♡」

カリ♡

カリカリカリ……ッ♡

ご褒美みたいに勃った乳首を爪先で引っかかれる♡

「ええ子やね、ちゃんと食べたやん。毎日おっぱい採まれて敏感になってもうたんや、ほんま、可愛えなあ……」

「あっ、あっ♡ うう……っごめ、なさ……っ♡」

「んー? もう謝らんでええよ、くすぐったいって誤魔化さずに気持ちよおなったこと、ちゃんと言えて偉かったなあ」

「ん……ふ、う……♡ ……は、はい……っ♡」

褒めるみたいに優しく、布越しにカリカリ♡ すりすり♡ と撫でられて体が仰け反る。媚びたような甘い息が止まらない。

声を抑えようと口元に手を伸ばすと、諫めるように先っぽを激しく弾かれてびくんと肩が揺れる。

「紗季ちゃん、手はお膝に置いとこうな」

「あっ、ううっ♡ ……っで、でも…わたし、へんな声、でちゃって…っ♡」

「変やないやろ、可愛い声聞かせてや？ 紗季ちゃんはええ子やから、出来るやんな？」

「っっっ♡ ……♡ は、はい…っあっ♡ ん、んうう…っ♡」

きゅ♡ すりすり♡ こりこり…♡♡

頷いた途端、勃起した乳首をつままれて喉の奥が潰れる。全然可愛くないのに、よしよしてするみたいにつまんだ乳首の先をくるくる♡ 撫でられてまた濁った声が溢れ出る。

（恥ずかしいのに、いい子いい子ってされるみたいに撫でられるの気持ちよくて…っ♡♡
布越しでもどかしいけど、ずっとされてると、頭ばちばちしてきちゃう…♡♡）

「こうやって先っぽだけ捕まえられて引っ搔かれるん、気持ちええなあ？ 息荒くなって、うなじまで真っ赤で……可愛えなあ、ほんまに」

「うう……っ、ふー……っ♡ ふー……っ♡ ♡ あっ!？♡ まっ、影虎さ……っ直接だめ、です……!」

「こないだは、直接触って頂いても……って言うと思ったやん。その為に下着外してくれたんやろ？」

「そ、それは……っそう、ですけど、~~~~っっひ、い……っ♡♡」

影虎さんの手がシャツの中に入ってお腹からじわじわと直接おっぱいに迫ってきているのに慌てて身じろぐと、大きな身体でがっしりと固定されて逃げられなくされてしまった。それだけでもなぜか背筋がぞくぞくしてしまっていたのに、おっぱいの形を確かめるみたいに撫でた手があっさり先っぽに辿り着いてしまっって引き攣った声が出る。

「~~~~あっ、あ、あっ♡ 影虎さ、……っうう、こんな、きもちいいの、だめえ……っ♡」
「……ふ……、気持ちいいならええやんか、紗季ちゃんのかかわいい乳首は嬉しい嬉しいっ

てしとるよ？ ほら、ここ、ぴん……っ♡ って勃起しとるの、わかるやろ……？」

かりかり♡ すりすり、こりこりこりっ♡

ここ、って言われながら先っぽを撫でられて、爪先で何度も甘く弾かれて腰の疼きが止まらない♡

気付けばシャツは胸の上でたくしあげられて、ぴん♡ と乳首が勃った恥ずかしいおっぱいが丸見えになってしまった。

「っ♡ あう……っ♡ だ、だって……わたしっ♡ 影虎さんの、や、やくに……っぐう♡」

「んー？ なんよ、俺の？」

「影虎さんの……っ役に、立ちたくて……っなのに、わたしだけ、こんな……っきもちよく、てえ……っ♡」

「ふっ……かわええなあ、役に立つとるよ？ こうやって紗季ちゃんの乳首カリカリして、ヨガってるかわええ声聞けるの、ほんまに癒されるで」

「そんなっ……ぜ、ぜったい、うそ……っひ、あっ！？♡ あっあっ♡ごめ、ごめんなき、やめ、くっくっくっああ……っ♡♡」

「謝らんでええよ、嘘やないって分かるまでしたるから。ああでも、紗季ちゃんはごめんなさい言いながら乳首捏ねられる方が気持ちええんかなあ……？」

きゅっ♡ きゅむ♡

カリカリ♡ カリカリカリッ♡♡

否定した途端に直接摘まれて、尖った先端を思い切り捏ねられてしまった。

ちがうって言いたいのには腰がずっとぞくぞくしてちっともまともに言葉が紡げない。次第に足に力が入ってきて、足先を丸めてすりすり♡ とこすり合わせてしまう。

「く、……っひ……っ♡ 影虎さん……っわたし、な、なんか……っあ、お♡ お——おかし……っ♡♡」

「うんうん、足もじもじしとるなあ、気持ちよさそうで可愛いわ。こんなちよっと引っ掻かれとるだけで、なア……紗季ちゃん、ヘコヘコしとる腰も止められへんねや？」

「あっごめ♡♡ こし、とま、とまら、なっ、影虎さ、あつまって、ま、くっひ、ああ……っ♡」

「さっき待ったやん、もう待ちきれへんなあ……」

いじられ続けてぷっくりと膨らんでしまったそこに少しづつ力を込めて、まるで搾乳をするみたいに摘ままれる。浅ましく腰がへこへこ♡と揺れて止まらない。

感じたことのない熱がお腹の奥に広がって、足がぎゅっと丸まる。

(なにこれ、なにこれ……っ、乳首触られてる、だけなのに……っ♡ すごい、くる、くる……っ♡♡)

「っく、うぐ……っあ？♡ っあ、あ、あっ！？♡ まっ、かげとら、さ、ダメえ、はなし……っ~~~~~!!?!!?♡♡」

びくんっ♡ びく、びくびくっ♡♡

ほとんど強制されるように身体が跳ねる。声も出ないまま、腰をぐんっ♡ って突き出して、わたしは……ただ乳首を触られているだけで、思い切り、イってしまった♡

「……ああ、ほんま、可愛すぎや……あかなあ、これは」

「は、ひ…………っ、…………？ わ、わたし…………どうなって、？」

「…………、…………どうもせんよ、いつも通りおっぱい触らせてくれただけ、な。ありがとうな？」
「へ…………？」

はふはふと肩で息をしていると、影虎さんはぐっと思を詰めた気配がした。すぐにあっさりと手を離されて、服を直されてしまう。

余韻にふわふわとしながらも不思議に思っつて影虎さんのほうに向き直ると、さっきみたいな熱のこもった瞳じゃない、いつも通りの優しい顔に戻ってしまった。

どこか肩透かしを食らったような気持ちを抱いていると、困ったように少し笑って頭をぼんぼんと撫でられる。

「ごめんなあ…………紗季ちゃん可愛くて、やりすぎてもうたわ」
「…………っ？ そんなこと、ないです…………っ」

もう終わりですか、なんて言えなくて口を噤んでいると、まるで猫にするみたいに頬をゆるゆると撫でられる。

その手つきがどこか名残惜しそうな気がして、また腰が疼く。
それなのに。

「……やめとこか、紗季ちゃん」

「へ……っ?」

「もう触られるのも慣れたやろ? もうこんなん、やめにしとこ。俺の役に立つ言うたら、店の手伝いとかが掃除とかかしてくれたらええんやから」

優しくかけられる言葉に、視界が滲んでいく。

これ以上はダメだって、遠回しに言われたような気がして、それが悲しくて、ぼたぼたと涙が溢れ出てしまった。

「——っ紗季ちゃん、」

「わ……っわたしが、だめって、は……っはなしてって、いったから、ですか……っ?」
「そういう訳ちゃう、違うんよ、紗季ちゃん。俺があかんから——」

「もう言いません……っ、ちょっと、びっくりしただけで、嫌じゃなくて……っそれに、」

「紗季ちゃん」

「その——もつと、なんでもします、わたし……っ胸、だけじゃなくて、くちとか……ここ、も……はじめてだから、あんまり……よくないかも、しれないですけど……さ、さっきので、ぬれてる、から……っ」

「紗季ちゃん、あかん、」

涙が止まらないまま、履いていたショートパンツを下着ごとずり下ろす。慌てて止めようとする影虎さんの腕から逃げるように少し距離を取って、震えながら足を開いた。

いったばかりでぬるついたおまんこを両指で広げる。恥ずかしくて怖くて、体が震えるけれど、それよりも、やめられるほうが嫌だった。

「ここ、つかって、くれませんか……っ？ お、おなほの、代わりでも……——っだから、……やめ、ない、で……っ」

ぐずついたまま、消え入るような声でお願いをする。

呆然としている様子の影虎さんに、やっぱりダメなのかと思ってまた涙が溢れた——そ

の瞬間だった。

突然、どさりとソファアに身体が沈む。視界が影虎さんでいっぱいになる。サングラスが反射して表情が見えない。

驚いて何も言えないでいると、低く掠れた声が飛んできた。この間みたいに脅かすわけじゃない、本気の、欲情した声だった。

「あかんで、紗季ちゃん」

「へ……」

「ここやのうて、おまんこ、やろ？ お願いする時はもっとはっきり言わな」

「……！ っあ、あ……♡ はい、ごめんなさい……っ♡」

「ふ、素直やなあ……こんなん言われて嬉しそうにごめんなさいして、そんなん、戻れへんようになってしまふから止めたんやけど、なあ……」

覆い被さっている影虎さんが緩やかにわたしの首をなぞる。

サングラスが少し下にずれていた。赤みがかかった目の瞳孔が開いていて、さっきみたいな獲物を見る視線に戻っていたことに、どこか安心する。

「紗季ちゃん、さっきのがチャンスやったんやで？ もう、逃がしてやれへんよ？」

「にげません、——っ!? んく、う……っ」

「なあ、そんな健全な趣味しとるわけとちやうで、俺」

指輪でいっぱい長い指がわたしの喉元をゆるやかに押す。

少しの苦しさと共に息が止まって、弱点も呼吸も全て握られてしまったような感覚に陥って頭がくらくらする。

でも。

それすらも、わたしには、嬉しかった。

「……っ教えて、ください……♡ わたしのからだ、ぜんぶ……影虎さんの、ものに、して……っ」

かすむ視界で声を搾り出すと、影虎さんが目を細めて笑う。

「ええよ、徹底的に教えたる。もっと上手にまんこ差し出せる俺好みの女になりや、紗季ちゃん」

その日から。

わたしと影虎さんの日々は、浸食するようにならわっていった。

「ふー……っ♡ ふー……っ♡ ううっ……か、影虎さん、……も、むり、い……♡」

閉め切った部屋に濁った声が響く。

今日は下着をつけることすら許してもらっていない。

裸のまま、四つん這いで、しっかり服を着こんだ景虎さんにマウントを取られるみたいに

覆い被さられて……ぶら下がったおっぱいの先っぽをずっと、カリカリ♡ カリカリ……♡ と、引っ搔かれています。

「なあんよ、そんな泣き言言うて……まだ十分も経つとらんで。俺好みのエロ乳首になるんやろ？」

「ううー……♡ でも、わたし♡ きょう、その……ずっと、きもちよく、て……♡♡」

わたしは今日ずっと、おっぱいに吸引カップをつけられた状態で過ごしていた。

なんの手伝いもできずに、買ってもらったばかりの大きなふかふかのベッドに丸まって、微弱に続く快感をこらえ続けることしかできずにいて。

夜、ようやく帰ってきた影虎さんにカップを取って貰ってすぐ、クリームを塗られて、そこからずっと、カリカリされ続けている。

「ああ、吸引気持ちかったんや？ 乳首も乳輪も朝よりぷっくりして、立派なエロ乳首になってきたなあ」

「うう……恥ずかし、っんあっ!?!♡ あっごめ、ごめんなさ、っあ、あっ♡」

「何が恥ずかしいん？ 俺好みになるんやろ？ やったら、エロ乳首に育ててくれてありがとうございます、やんな？」

「っう、う……っ♡ はい、……え、えろ乳首に、育ててくれて、くっひっ♡ あ——ありがとう、ございます、っんんっ♡」

きゅ、くりゅくりゅ♡ ぴんぴんぴんっ♡

真っ赤に腫れてしまっている乳首を摘ままれて弾かれてしまっって身体が仰け反る。自分で触ったこともろくなかったのに、すっかり敏感になってしまった。

「ん、ちゃんとお礼言えてええ子やね。今日はこれも付けたるわ、足開き」
「へ……あつ、はい……っ？」

これ、と指すものが何かわからないまま、言われた通りに足を開く。

と、小さくて冷たい何かがおまんこに触れる。びくりと揺れる腰を抑えられて、既に濡れそぼったクリトリスに宛がわれて、きゅぽ……っ♡ と、吸われてしまった。
何を言う間もなくカチツとスイッチを入れられる。

「びい……っ!?♡　　くくっあ、あ、これ……ダメ、え……っ♡」

「ダメやないやろ?　さっき教えたこと忘れてもうたん?」

「あうっ、う♡　ごめ、ごめんなさいっ♡　く……クリも、育てて……っくれて、あり、っ!?

♡　まっ、つよいの、あっ♡　まっ……あ、あ……っ♡♡」

「よしよし、強い気持ちええんやろうけど、ちゃんとお礼は言わなあかんな?」

「くくっうう♡　だって、つよ、くて、ああっ!?!♡　だめ、それダメええ……っ♡」

きゅぽ♡　きゅっぽ♡　ちゅぽぽぽ……っ♡

何度も吸われてただでさえ辛いのに、吸引部分の奥からシリコンのような柔らかな素材が出てきてクリトリスを包まれ扱かれる♡

「お礼も言えへんようになってダメダメ言いながらヨガって……しゃあない子やなあ、紗季ちゃんは」

「ひ、ぐ……っ♡　ごめ、あっ♡　ごめんなさ、きもち、よぐてえ、あ♡　だめこれ、すぐイっちやううっ♡♡」

「いくときは？　なんて言うんやっけ？」

「あ、う……っ♡　あ、あくめ♡　アクメきますっ♡」

「んふ、ええ子。こんな小さいおもちやでちょーっとクリいじられたくらいであっさりアクメするの、ほんまにかわええなあ……ほら、宣言しいや？　何されていくん？」

カリカリカリッ♡　ちゅぼ♡　きゅぼ、ちゅぼぼぼっ♡

敏感乳首を容赦なく爪先で引っ搔かれて、その間もクリトリスを吸われ、ぬるついたシリコンで扱かれ続けて。影虎さんの大きな身体に隠れてしまうくらい抱き込まれたまま、わたしはひゅ、と喉を震わせた。

「〜っふ、ぐう……ちくびっ♡　ち……乳首かりかり、されて、っあ♡♡　っくり、くりすわれてえ♡　あっダメ、かげとらさっ♡♡　あくめっ、アクメぐるうう……〜っ……あ……っ！？♡」

——ぎゅううう……っ♡♡

いく瞬間、思い切り抱き込まれて、ビクつくことも出来ずに情けなくおまんこだけがひ

くひく♡ と収縮する。気持ちいいのと不完全燃焼さが混ざりあってつらい。

(うう、きもちいのに、くるしい♡ もっとちゃんとイきたかった、のに……♡♡)

吐き出しきれない快感にもじもじと揺れる身体を今度は膝立ちにさせられてしまった。後ろから這う大きな手にひく……♡ と下腹が震える。

「よしよし、今日は何回でもイってええからな、紗季ちゃん。立派なデカクリになれるよう頑張ろな」

「んん、え……っ? でか、くり……っ?」

「そうやで、俺のものになるんやろ? ちゃあんと全身、俺のやってわかるようにせな」

「うう……♡ は、はいっ、がんばります……っひあっ!?!♡ あ、あっ、お……♡」

きゅぽきゅぽ♡ ちゅこちゅこちゅこっ♡

恐る恐る頷いた途端、吸引機を思い切り押し当てられて引きつった声が出る。いったばかりの身体にはつらくて腰が逃げを打つけれど、後ろにいる影虎さんの身体で阻まれてし

まう。

「こーら、腰引いたらあかんやん。取れてまうやろ？」

「ひっ♡ か、かってに、なっっちゃ、ああっ♡♡ むくのため、まって、ま、くく……っ♡♡」

取れそうになったついでとばかりに、ぐにゆう……っ♡ と皮を引っ張られて真っ赤になったクリトリスが顔を出してしまった。

敏感すぎるそこにまた、ぷちゅ♡ と吸引カップがキスをする。先っぽのところを柔らかなイボでくりくりゅ♡ 擦られて背筋が仰け反る。

「そうそう、上手やなあ。さっきちゃんといききってへんやろ？ しっかり身体反らせて気持ちええの受け止めとき」

「は、ひ……っ？♡ なんで、ばれて、っあ、あ♡ むり、これええ……っ♡」

ちゅぽちゅぽちゅぽ♡ ちゅう♡

れろれろれろっ♡♡

カップの中のシリコンがまるで舌先みたいに動いて頭に電流が走る。何もされていないおまんこから、ひっくり返した蜂蜜瓶みたいにとろとろと愛液が伝い落ちていく。

「ずっとイきたそうに腰かくかく震わせて、丸わかりや。ほら、当てといたるから自分で振り？　ヘコヘコって、できるやろ？」

「ううう……♡　ふぁ……っん、ん、んん♡♡♡」

「そうそう、上手、子犬みたいでかわええわ……」

言われた通りにへこへこ♡　へこへこ♡　とはしたなく腰を振ると、影虎さんが合わせておもちゃを押し付けてくれる。

恥ずかしいのにカップの中でちゅうちゅう吸われるクリトリスが気持ちよくて、夢中で何度も繰り返していると、すぐにまた絶頂の波がやってきた。

「あ、あ……っ♡　かけ、かけとらさ……また、あ、いく、あくめ♡♡　あ……っあくめ、くるうう……っ♡♡」

「もうアクメするん？ ほんま、よわよわのクリやなあ……どうする紗季ちゃん、このまま自分で腰振ってアクメする？ それとも、手伝ったるか？」

「あう、あっ♡ うう、てつ、てつだって、つだって、影虎さ……てつだって、え……♡」

「ふ……、甘えん坊さんやなあ……」

仕方なさそうに笑われて目元がとろける。

影虎さんにイかせてもらえることに安心して背をもたれると、腰に腕が回ってきて——
びくりとも動けないほど強く、固定されてしまった。

「ふあ、…あ、あっ！？♡ ひい、あ、あ〜っ！！♡ ま、っでえ、あっむり♡ これだめ、すぐいぐ、いくからあ♡」

「せやからいくの手伝っとるんやん、ええよ、いつでもアクメしいや？ 何回でも、な」

ちゅぽ♡ ちゅぽ♡

ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこ♡

動けないクリトリスに思い切りおもちゃを押し当てられて、仰け反った首をもう片手で

緩やかに捕らわれ、喉元を抑えられる。

暴力的な快感の前に為す術もない。

(くるしい♡ くるしい、のに♡ きもちよくて、わけわかんない♡ もうイク、イク、ア
クメ、きちゃう……♡♡)

「んぐ、うづ……っうあっ♡ いぐ、あくめ、くる♡ あくめきますっ、——……っく、う
う……っ♡♡」

びくん♡ びくびくびく……っ♡

身体が仰け反って、脳天から足先まで絶頂感が駆け巡る。気持ちよさに頭が真っ白になっ
ていた、最中だった。

「——っっ!?! ひい、あ、あっ!?!♡♡ まって、とめ、とめて、今イっでる、からあ
あっ♡ 影虎さ……っきもちいびの、とめてえ……っ♡♡」
「何回でもイってええ言うたやろ?」

あまりの快感に逃げを打つ身体を影虎さんが許してくれる様子はない。おまんこにおもちゃを当て続けながら、もう片手を首より下に滑らせて、勃起したままの乳首をきゅ♡と捕まえられてしまう。

(あ♡ ダメ、これ……っ♡ イったばかりなのに♡ またイク♡♡ アクメきちゃう♡♡ イくの、おわらないい……っ♡♡)

絶頂から降りられない。

ナカのひくつきが止められない。

このまま気持ちよすぎて、死んでしまうかもしれない。

「~~~~っ♡ うう、あつ、あ！？ だめ、あっ♡ 影虎さんっ、また、またくる、またアクメ、きちゃうう……っ♡♡」

びくびくっ♡♡ ふし……っ♡♡

ぷしゃああ……っ♡♡

わけがわからないまま、絶頂と共に一度も触られていないおまんこのナカから暖かいものが溢れてしまった。

「あ……あ……っ？ ごめんなき……わ、わたし……おしっこ、でちゃ……っ」

「ふ……かわええなあ、紗季ちゃん。おしっこやなくて、潮吹きしたんやで。クリいじめられて首締められて、気持ち良かったんやなあ……、……っ」と

優しい声と共にずっと動いていたおもちやが止まって、身体からがくんと力が抜ける。みっともないほど痙攣する身体をかき抱くように支えられた。

(……あ、どうしよ、身体、力入らなくて……ひざ、崩れて……影虎さんに、体重、かかったちゃう……)

「紗季ちゃん」

また、優しい声が鼓膜を揺らす。

返事を、しないと。そう思っただうにか上を向くと、額へと触れるだけの口付けを落とされた。

「よお頑張ったなあ」

「……………あ、……………あ、……………っ♡」

額へのキスは「終わりの合図」だ。

影虎さんはいつも、わたしの身体が限界になると、こうして合図をくれて。

とびっきり甘やかな声を出して、やさしく触れてくれて……………身体も心も、ケアしてくれる。

「あ……………ごめん、なさい……………わたし、」

「んーん、頑張ってくれたやん。ごめんなあ、身体きつかったやんな……………けど、ほんまに可愛かったで。潮吹きまで出来て偉かったなあ、見せてくれてありがとうな？」

「ん、ん……………わたし、じょうずに、できてましたか……………？」

「上手やったよ、ほんまにええ子。……ああ、クリ赤くなってもうたなあ……クリーム塗った
ところか。もう少しだけ、触ってええ？」

「はい、おねがい、します……っああ、ん……♡」

ぬりゅ……♡

すり、すり……♡

胡座をかいた影虎さんの膝に向き合う形で乗せられて、腫れて真っ赤になったクリトリ
スにそっとクリームを塗られる。敏感なそこがびくびく反応してしまっただけで恥ずかしい。

「痛ない？ まだ気持ちええ？」

「はい、痛く……っないです、っあ……ん……♡ きもち、い……♡♡」

すりゅすりゅ……♡♡

ちゅくちゅく♡ ちゅこちゅこちゅこ♡

クリトリスの根本まで塗り込まれて腰がかくかくと震えてしまう。優しく太ももを撫でな
がら胸元にキスをくれて、恋人同士みたいな触れ方にきゅん……♡♡ と心臓がわななく。

「ん、あつ、あう……………♡ 影虎、さあん……………♡♡」

「ん……………? どうしたん、つらい? もうちょいだけ、な」

「やあ、っ♡ ちが、くて……………おねが、イかせて……………このまま、イかせて、ください……………っ♡」

「ふっ……………ほんまに、かわええなあ……………ええよ、触っといたるから、いつでもイキ」

こりこり♡ ぬりぬりぬりぬり♡

少し大きくなってしまったらしいクリトリスを一定の間隔で抜かれて、徐々に遠のいていた絶頂感が帰ってくる。

力が入らないまま弱弱しく抱きついて甘やかな快感を全身で受け止めた。

「——あ、あ、影虎さ……………っいく、いくう……………あ、あ……………っ♡♡」

ほどなくして、びくびく……………っ♡ と身体が震えてとろけるような絶頂感に襲われる。

力の抜けきった身体で凭れて余韻に浸っていると、いい子いい子ってするみたいに頭を撫でられる。嬉しくて擦り寄ると、小さな笑い声と共に、つむじにキスが降ってきた。

——安心して、瞼が重くなってきてしまった。

「よしよし、頑張ったから眠くなってもうたなあ」

「ん……、でも……かたづけとか、おふる……」

「ええんよ、今日はこのまま寝とき。いっぱい頑張ったんやから、な？ ゆっくり休み」

——この温度差で、頭がずっとふわふわする。

叩きつけられるような激しい快感と、その後にもらえる頭がとろけるような甘い時間に、わたしはずっと囚われたままだ。

こんなにわたしばかり気持ちよくて、幸せにしてもらっていいんだろうか、といつも思う。

わたしも、もっと影虎さんのことを気持ちよくしたい。どこだって乱暴に使ってもらって構わないのに、影虎さんの触れ方は激しいだけで、乱暴だったことは一度もない。

唇へのキスはおろか、未だにおまんこの中にすら触られたことがなくて……少し、寂しい。

「おやすみ、紗季ちゃん。また明日な」

「……はい、おやすみなさい……、また、あした……かげとら、さん」

優しい声が響いて眠くなり、思考が霧散する。

柔らかく抱き上げられ、ベッドにゆっくりと下ろされるまでは、かろうじて意識があったと思う。

けれど、唇に柔らかいものが触れた感覚が……夢なのか現実なのかは、わからなかった。